

# 言語運用における個人差と性格との関係について

## —— 理論的枠組と研究概観 ——

小 林 正 佳

### 1. はじめに

人によって使うことばや話し方が異なるのはなぜだろうか。これはとても興味深い問題でありながら、今のところ明確な解答が出されていない。

日常生活を営むなかで、ことばが社会的及び個人的に異なっていることにわれわれは気づかされる。社会的な異なりは、地域、性、年齢、職業などの要因によるもので、そのことばは各々、方言、男性語、女性語、大人語、幼児語、商人ことばなどとして捉えられる。一方個人的な異なりとは、例えば話す速度がはやい／おそい、漢字を多く使う、意味内容の同じことを伝える際のことばの量や身振りの有無などである。

これまでの言語研究により、ことば（使い）の社会的異なりの因果関係はかなり解明されている<sup>1)</sup>。しかし、個人的異なりのそれはまだである<sup>2)</sup>。言語運用における個人差を生む要因を明らかにしようとする研究があまりなされていないのである。

言語運用上の個人差を生む要因としては、体格の差、発音器官の大きさ・形状の差、知能の差、教養の程度や趣味の違いなどいくつか考えられるが、心理的要因ともいべき性格（personality）が最も重要視できると思われる。性格は個人個人異なっているし、言わばことばの選択活動である言語運用に意識的無意識的に大きくかかわっていると考えられるからである。

本稿は、言語運用における個人差と性格との関係を解明するための研究の理論的枠組と、この問題を扱ったこれまでの研究にどのようなものがあるかを示すことを基本的な目的とする。したがって筆者は、本稿が今後この方面の研究を進めていく上での指針となることを意図するものである。

### 2. 理論的枠組

言語は個人に属するものなのか、あるいは社会に属するものなのかという

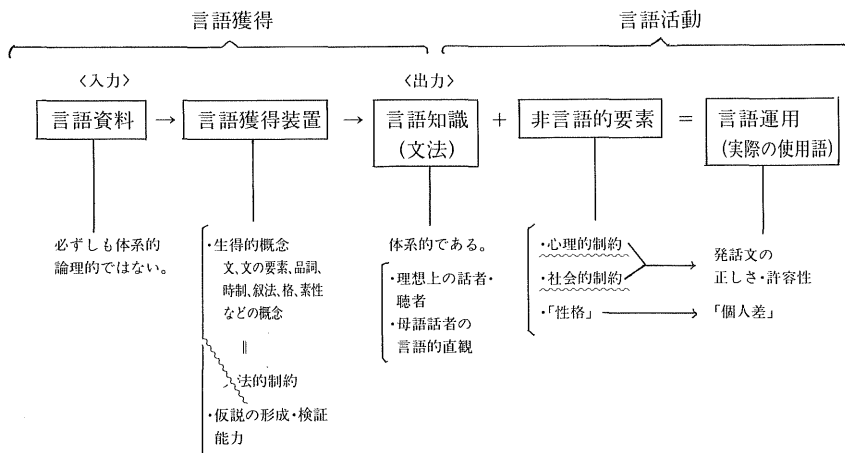
問題は、Saussure (1916) のラングとパロールとの区別によって理論化された。ラングは社会成員が共通に持っている規約の総体、すなわち言語記号体系という抽象化された社会的なものであり、パロールは社会慣習の言語記号体系を実際に使うという遂行的側面、すなわち現実の日常使用語という具体化された個人的なものである。

Saussure のラングとパロールの二元論は、そこに内在する矛盾を Labov (1972) によって指摘されたが、その矛盾点を解決したのは Chomsky (1965) のコンピテンスとパフォーマンスとを区別する理論である。前者が言語知識、規則の体系という抽象物であり、後者がその実際の使用という具体物であるという点では Saussure の二元論と同じであるが、Chomsky は両者をともに個人に所属させたわけである。言語の使用にみられる個人差と性格との関係を考えていくためには、個人の中に言語知識（コンピテンス）と言語運用（パフォーマンス）との別を認める Chomsky の言語理論に立脚するのがよいと筆者は考える。

Chomsky は、言語知識（＝文法）の獲得は生得的概念（innate ideas）という先天的な要素によって制約され方向づけられていると考える。その理論は、理性・認知主義的言語理論といわれる。比嘉（1976a, 1976b）は、とりわけ制約ということを強調して理性・認知主義的言語理論について論じている。これをまとめ、さらに性格と言語運用との関係を考慮に入れて、筆者は次のような図式で表わすことにした。（次頁）

言語には三つの大きな制約がある（比嘉, 1976b）。一つ目は文法的制約で、先天的言語概念に基づいて文法が形成され、さらにそこから文が実際に生成されるということ。二つ目は心理的制約で、記憶力、体力、注意力の働く範囲内でしか文法を使えないために、非常に長い文や複雑な文は作らないし、理解も困難であるということ。三つ目は社会的制約で、性、年齢、階層、場面などの社会的要素によって、特定の社会状況で使うべき語句や文型が決められてくるということ。そして比嘉は、文の許容性や正しさを論じるには、これら三つの制約を考慮に入れなければならないと述べている。

筆者は性格を一種の制約とみなし、言語知識に加わる非言語的要素として心理的制約及び社会的制約と並置させて考えている。ここで重要な点が二つある。一つは、制約としての性格及び個人差の存在段階に関してである。



Chomsky の理論では、コンピテンスは等質的な理想状態とされる。したがって、性格（の違い）は対象に影響を及ぼして何らかの差異を生じさせるとすれば、言語知識を実際に使用する段階においてかかわってくるものであり、個人個人によって実際に使用されることばに個人差が生じてくるのだと考えることになる。第二点は、性格は言語の三大制約とは違い、文の許容性や正しさの判断に本質的にはかかわってこないということである。つまり、1.で挙げたような言語運用の個人差は、文法的に正しくないとか、心理的働きの限界を越えているために理解できないとか、社会的に許容されずに何らかの制裁を受ける結果を招くといったことにはならない性質のものだということである。<sup>4)</sup>

以上、性格という非言語的要素が、言語知識を使用する段階で影響を及ぼし、それが個人差となって現われる、と考えられることを述べた。では、これを明らかにするためにはどうしたらよいか。Chomsky や Saussure の採った、抽象化された言語を研究対象とする姿勢<sup>5)</sup>では問題は解決されない。個人個人の言語運用面を研究対象として、そこから得られる現実の言語資料を分析し、その言語運用者の性格との相関関係を追求しなければならない。すなわち、Labov (1972)、柴田 (1978)、野元 (1978) らが説く社会言語学の研究姿勢<sup>6)</sup>が必要なのである。言語運用における個人差と性格との関係を解明する研究は、社会言語学の研究として位置づけることができ、基本的に

は社会言語学的手法によって行なわれるべきであると筆者は考える。

### 3. これまでの研究

ここでは言語運用における個人差と性格との関係について、その問題の全体あるいは一部に関してこれまでになされた理論的及び実証的研究をいくつか取り上げ、説明されている点や問題点などを示す。

#### 3.1. 研究の可能性・必要性

言語運用における個人差と性格との関係に関する研究は、筆者の調べた限りでは概して少ない。その理由として主に次の二つが考えられる。一つは、この研究の必要性や意義が一般に認められていないということ。もう一つはその反対で、必要性や意義は認められていながら、問題の性質からして、方法論の確立が困難であるとか、複数の学問分野にまたがった広範な知識や分析が必要となるために手に負えそうにもないと考えられているということ。筆者は当然二つ目の理由によるものと考え。比嘉（1976b）によれば、人間が心理的・社会的な生物である以上、Chomsky の理論言語学が研究対象とする「純粋な言語」は理論的にしか存在し得ないわけで、この理論的な言語と実際に使用されている言語とのあいだにある差を生み出しているものが心理的・社会的制約であって、これを究明しようとするのが心理言語学であり社会言語学である。筆者は 2. で、性格が心理的制約、社会的制約と並ぶ一種の制約と考えられることを述べた。したがって、その研究を心理言語学的・社会言語学的研究として位置づけることができるわけである。

研究の可能性、必要性、方向性を示唆しているものを具体的にみていくことにする。

南（1979）は、最大は国家・民族という規模の集団から、最小は個人にいたるまでの各集団に現われる言語行動の型を全体にわたって説明できるような理論の樹立を理想としているが、個人の言語行動の背景には個人的気質が働いていると説いている。そして言語行動の個人的な型、すなわち個人差を明らかにするためには、社会的な型や偶発的な要素と区別して研究することを提案している。

野元（1978）は、Saussure の二元論に基づいて個人差を次のように捉え

ている。人間はラングを使って自己を表現するわけだが、その時社会慣習としてのありふれた陳腐な表現を嫌って斬新な表現をしたいという欲求と、他者と伝達することの重要性を第一に考えて社会慣習としての言語を使おうとする気持ちとが張り合っていて、そこに個人にかかわる四つの要因——生理的、社会的、心理的、発達の——が作用し、それが表現の個性、すなわち言語運用における個人差となる。また野元は、個人差を生む社会的要因を解明できたとしても、なおパーソナリティという心理的要因が個人差を起こすのだろうと言い、いずれにしてもこれまで手薄であった言語の個人的側面の研究を、パロールに分析資料を求め、個人差がいったい何に基づいているのかを実証的に研究する必要性を説いている。

井出（1981）は、木村治美の書いたエッセイを資料として、その文章にみられるパーソナリティとしての女らしさが出ている箇所を取り出してその特徴を述べている。その背景にはことばの変種、ことに個人的変種への関心が伺われる。ことばの社会的変種を対象とした研究は盛んになってきたが、変種の最小単位である個人的変種にはあまり目が向けられていないことを指摘し、さらに社会的変種が社会・文化とかかわり合いがあるのと同様に、個人的変種はその個人のパーソナリティに負うところが当然あると述べている。性格の表われとしての個人的変種の研究は今後の課題であるとしている。

文学作品中の登場人物の性格が、その作品のことばの中にどのように表現されているかを言語学的に分析したものに Friedrich と Redfield（1978）がある。この論文はことばの個人的変種の研究全般及び性格との関係にも言及しており、示唆的な見解がいくつかみられる。この研究で彼らが前提としていることは、個人は社会・文化レベルにおいてそうであるように、言語レベルにおいても変異の最小、究極の組織であるということと、個人のことは自己表出の手段であるから、その個人の性格を表わすものだということである。そして実際に文学作品中のことばを分析することによって、性格の表われとしての個人のことは研究を、従来のように音声面<sup>7)</sup>だけでなく、形態、統語、修辞の面にも焦点をあてていくことにも意義があることを実証している。

Sapir（1927）は、人間は相手の使うことばからその人の性格を直観的に感じとっているものだと述べ、そこには性格の表われとしてのことばという認識がある。そしてことばと性格との関係を解明するための研究法を二つ提

案して、一つは個人がかかわっている社会的要素と個人的要素とを区別して分析すること。もう一つは、人のことばのどの部分から性格を判断できるのかを明らかにするために、実際に使用されることばを言語の諸要素あるいは諸現象の集合体と考えて、音声→リズム→発音→語彙→文体というように段階を追ってことばを分析することである<sup>8)</sup>。

入谷（1964）は、個人の、言語による表現の仕方が異なっている様を、ことばの諸相から検討している。この論文では過去の諸研究が概観され簡潔にまとめられているのだが、そこから結論として次の三つのことがいえるとしている。(1)声、語調のリズム・速さは、性格特性と深い関係がありそうである。(2)文書や文体も性格特性を表わすようである。(3)個人のもつパーソナリティは、独自の表現によることばを生み出すが、これは社会的・文化的環境の影響も受ける。

## 3.2. 各 論

3.1.では言語運用の個人差と性格との関係を解明する研究を大局的な観点からみた。そこで本節では、個人差というものをどう考えるかという問題を扱った論文をまず取り上げ、次に言語運用と性格との関係を主に実験・調査に基づいて解明しようと試みた研究を、書きことばに関するものと話しことばに関するものとに分けて示し、最後に心理学の分野における性格の二通りの理解の仕方について簡単に述べることにする。

### 3.2.1. 個人差

個人差に関する体系的な研究はほとんど行なわれていないようである。個人差の実例を示し、その要因を考察した理論的、実証的研究として野元（1957, 1978）がある。とくに1957年の論文は国立国語研究所が行なった数々の実地調査の結果に基づいており、発音器官、調音、音声・音色、語彙、語法、表現法、敬語使用、話す速度、発話や文の長さというように主に話しことばに関してであるが、それらの言語レベルに表われる個人差を例示し、それぞれ野元の考える個人差を生む四つの要因<sup>9)</sup>のどれと関係しているかが論じられている。そのなかでも野元は、気質、パーソナリティという心理的要因に注目しており、言語使用者の性格を捉える方法が重要になってくることを示

唆している。しかし、1978年の論文では、1957年から二十年以上経ったにも拘らず、性格調査法も含めて個人差の研究があまり進展していないと考えられるような現状報告がなされている。<sup>10)</sup> このことは個人差研究の難しさを示していると思われる。

原口（1978）は個人差と文法とのかかわりに焦点をあてて論じており、個人によって異なっているのは文法の中心的部分にあたるコンピテンスではなく、周辺的部分、すなわちパフォーマンスであろうと予測している。これは2.で筆者が述べた考えと一致する。しかし原口も、個人を取りまく社会的要素と純粋に個人的な部分との見分け方や切り離し方が難しいことを指摘している。

上野（1978）はアクセントにおける個人差について論じて、言語社会のアクセント体系が異なることは考えられないので、個々の単語をどう発音するかという点に個人差があると考えるべきだという見解を示している。

パンと白川（1977）は、現実の発話を分析資料として女性語の地域差、年代差、個人差について調査している。その結果、終助詞、空白補充語、音韻的特徴に個人差がみられたと述べている。

北海道における共通語化の調査において、地域と年齢という社会的要素に原因を求めることのできない言語運用上の個人差がある（柴田，1978）という報告もなされている。

ここでは日本の研究だけを示したが、欧米で発達した概念に「個人語（idiolect）」がある。これに関する議論は、Bloch（1948）<sup>11)</sup>、Halliday（1968）、Labov（1972）、Lyons（1981）、Weinreich 他（1968）を参照して頂きたい。

### 3. 2. 2. 書きことば

書きことばと性格との関連を取り扱う研究分野に文章心理学がある。この分野の先駆者である波多野完治は、「文は人なり」という立場を採り、文章中に個人の性格が表われ、逆に文章を分析することによってその個人の性格がわかると説いた。波多野（1935）の研究方法は、二人の作家の文章<sup>12)</sup>の特徴を、文の長さ、句読点、品詞、比喻、文の種類などの項目について、数量的処理によって示し、Kretschmer の性格論を援用して文章の特徴と作家の

性格との相関を論じるというものである。

波多野の心理学的文体論は、精緻な数学的手法を身につけた安本美典に継承された（山口，1979）。安本（1965）は、現代作家百人の小説の文体を、十五の項目について統計的に調べて調査項目間の相関係数を算出し、さらに因子分析を施して文章の性格として三つの因子——「漢文型－和文型」、「修飾型－非修飾型」、「会話型－文章型」——をみだし、それら三因子の働きの強弱により、作家百人の文章を八類型に分類している。文章の性格は作家の高次神経活動のタイプと結びついているという論に基づき、先の三因子の組み合わせによって性格類型的な高次神経活動の八タイプが決まり、それによって各作家の性格のプロフィールを描いている。

このように波多野と安本の方法は、実際の文章を数量的、統計的に分析して文章の性格をつかみ、そこから書き手の性格を解明していこうとするものだが、片口（1961）は、ロールシャッハ法による作家の性格診断を行なっている。言語使用者の性格を何らかの方法によって捉えることも、言語運用と性格との関係を解明するためには必要だと筆者は考える。

Brown と Gilman（1970）の心理言語学的研究は興味深い。これは、十九世紀末に米国マサチューセッツのコンコードで生活をした二人の Transcendalist、Emerson と Thoreau の文章を分析したものだが、この二人の作家が時代、住居、教育、文学ジャンル、テーマ、主義主張など、およそ性格以外の点では奇妙なくらいに一致していたために、文章に表われる個人的特徴と性格との関係を調べるのに恰好の対象となった。Brown と Gilman は、二人が同じ命題を表現するのに異なった文章を書くのは二人の性格の相違によるものだという仮説を立て、文章上の特徴と性格との相関関係を追求している。仮説が実証された一例として、一人称単数代名詞の使用頻度がある。計量的分析により Thoreau は Emerson より “I”、“my”、“me” を頻繁に使うことを明らかにし、有意性の検定を行なって統計学的に裏づけたあと、このことを Thoreau のもつ因習的な考えに反発するという強い攻撃的（aggressive）性格の表われだと説明している。

その他、筆者の性格が文章のどこに表われるかを調べたものに、3.1.で示した井出（1981）があり、文学作品の登場人物の性格と作品中のことばを対象にしたものに、やはり既述した Friedrich と Redfield（1978）がある。



筆跡特徴と書いた人の人格特徴との関係を解明する筆跡心理学の研究（黒田，1964）も、書きことばを対象にした研究に含めておく必要があるかもしれない。

### 3.2.3. 話しことば

Allport と Cantril (1934) は、声（voice）だけからその話し手の性格及び容貌の特性をどの程度判断できるかを、六百人以上の被験者を使って実験した。三人の男の声を再生して聴かせ、三人の内向性－外向性、支配型－服従型、政治的関心、年齢、身長、写真像など十一の特性に関して予め与えられている情報から、どの声（の主）がどういう特徴と一致するかを判定させている。全判定結果のうち七十四パーセントのものに正の相関があり、さらに四十七パーセントは統計的に有意であったことから、声はその人の内面（＝性格）及び外面（容貌）の特性に関しておおむね正しい情報を提供すると言える」と結論している。

Barbara (1958) も、話し方（speech）からその人の性格、知力、社会的地位などが判断できると述べている。

話す速さに関して調査したものに Feldstein と Sloan (1984) がある。Eysenck の外向性尺度に基づいて分けた外向性の人と内向性の人各二十三人の被験者に絵を見せて、それについて(1)自然な調子で(2)あたかも外向性／内向性であるように(3)意識的に速く／遅く語らせるという実験をしている。その結果、外向性の人が実際に話す速度（speech tempo）は内向性の人よりも速かったという。ただ、その程度は両者に対して一般に思われているほどには著しいものではないようである。

敬語の使用には当然性格が影響するという考えに立脚して国立国語研究所（1957）が行なった敬語意識調査がある。そこでは質問紙、スライド、面接などの方法で被調査者の性格を調査し、それと敬語使用意識との関係を調べている。しかし、固着的性格（rigidity）と丁寧な言い方とのあいだに高い正の相関関係が見い出された以外には、期待したような結果は出なかったと報告されている。

3.1.で言及した Sapir (1927) の論文も主に話しことばを対象にしたものである。だが、実際の調査・実験に基づいた考察ではない。この論文は、

性格の表われとしてのことばという認識を示し、具体的な二つの研究法を提案したところにこの方面の研究の古典としての意義と価値があると思われる。<sup>14)</sup>

### 3.2.4. 性格理解

心理学における性格の理解の仕方を簡単に述べておく。性格理解には大きく、類型論 (typology) と特性論 (trait theory) の二つがある。前者は、身体的特徴や心理的特徴などある一定の原理に基づいて少数の類型を設定し、個人の性格は類型のいずれかにあてはまるとして、個人の全体像や独自性を理解しようとするものである。一方後者は、全ての人間は数々の性格因子 (= 特性) を共通して持っており、各因子の集合として性格は成り立ち、個人個人の性格が異なるのは因子の量的な差のためであると考えられるものである。

言語運用と性格との関係を研究する場合には、どちらの立場を採るべきであるか、あるいは第三の理解の仕方が必要なのか、今後方法論を確立していく上で当然考えていかなければならない問題である。

## 4. ま と め

本稿は初めに、言語運用における個人差を生む有力な要因の一つとして性格が考えられるとし、両者の関係を解明する研究をする上での理論的枠組を示した。それは、この問題を理論言語学の言語理論に立脚して捉え、さらに実際に使用されたことばを資料として分析調査して両者の相関関係を追求していくという方法を採用することによって、社会言語学的研究として行なっていくことができるということであった。

本稿の後半では、この言語運用における個人差と性格との関係という問題に関してこれまでに行なわれた理論的、実証的研究のいくつかを取り上げて論じた。研究の数は少ないが、次の諸点に関しては複数の研究者が共通した認識をもっていることがわかる。

- (1) 言語運用には個人差がある。
- (2) その個人差と性格とのあいだには因果関係があり(そうであ)る。
- (3) 性格による言語運用の個人差は、言語の諸相に表われる。
- (4) 個人の言語運用は、社会・文化的要素と個人的要素との両方に影響され

る。

これらの共通認識から、今後の課題や方向性に関しても次のような共通した見解がみられる。

- (1) 抽象物でない、現実で使用された言語を研究の対象とする。
- (2) 言語使用者の性格をより良い方法でもって捉える。
- (3) 音声、語彙、統語、文体、話しことば、書きことばなど、言語（運用）の諸側面を分析する。
- (4) 個人の言語運用にかかわる社会・文化的要素と個人的要素とを可能な限り区別する。

しかしながらこれらの研究の問題意識やアプローチの仕方などは様々であり、これまでのところ一つの研究テーマとして確立しているという印象は受けにくい。

言語運用の個人差と性格との関係を解明しようとする研究は、理論、実証の両面とも困難な点が多い。しかし、言語運用といい個人差といい、また性格といい、これらは人間を知る上では興味深いテーマである。問題解決へ向けてまずは方法論の確立が望まれる。

#### 注

- 1) 先に挙げた用語や概念があることからもういえる。
- 2) 例えば、「早口」「おしゃべり」などの用語があるが、これらは現象面を記述したにすぎない。
- 3) 「ソシュールの逆説 (Saussurian Paradox)」 (Labov, 1972, Pp. 185-6)
- 4) 性格という要因は、制約というよりはむしろ言語運用に多様性をもたらす資源のようなものと考えたほうが適当かもしれない。
- 5) Saussure (1916) はラングの言語学を行なっていくことを明言し、Chomsky (1965) は完全に等質的な言語社会における理想上の話者・聴者を対象とすべきことを主張している。
- 6) Chomsky 流の言語研究と、Labov 流の社会言語学的研究の相違を理解するのに Labov (1972) と柴谷 (1982) が有益である。

- 7) Sapir (1927)、Newman (1930)、声紋鑑定の研究、1976年 バークレーで開催された「ことばの個人差」に関する国際会議などを指している。
- 8) そこには、音素→形態素→文→意味へと分析対象のレベルを分離させて言語の最小単位からより大きな単位へと進めていこうとしたアメリカ構造主義言語学の根本原理としての操作的手順の原型ともいえるべき考え方をみることができる。
- 9) 3.1.で示したもの。
- 10) 真田・柴田(1982)が行なった戦後日本の社会言語学の著作・論文の目録をみても、個人差に関する研究が極めて少ないことがわかる。
- 11) “idiolect”という用語は、Bloch (1948) が初めて用いた (Labov, 1972)。
- 12) 谷崎潤一郎『蘆刈』と志賀直哉『山形』。
- 13) 例えば川端康成の『雪国』の文章は、「和文・修飾・会話」型と判定されている。
- 14) この論文に言及している研究論文がとても多いことからそれがわかる。

#### 参 考 文 献

- Allport, G. W. and H. Cantril. 1934. Judging personality from voice. *The Journal of Social Psychology*, 5:37-55.
- Babara, D.A. 1958. *Your speech reveals your personality*.  
Spring field, Illinois: Charles C. Thomas, Publisher.
- Bloch, B. 1948. A set of postulates for phonemic analysis.  
*Language*, 24:3-46.
- Brown, R. and A. Gilman. 1970. Personality and style in Concord. In R. Brown. (Ed.) *Psycholinguistics*. New York: Free Press.
- Chomsky, N. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT press.
- Feldstein, S. and B. Sloan. 1984. Actual and stereotyped

- speech tempos of extraverts and introverts. *Journal of Personality*, 52:188-204.
- Friedrich, P. and J. Redfield. 1978. Speech as a personality symbol: the case of Achilles. *Language*, 54: 263-88.
- Halliday, M. A. K. 1968. The users and uses of language. In J. A. Fishman. (Ed.) *Readings in the sociology of language*. the Hague: Mouton.
- 原口愚常 1978「文法と個人差」『言語生活』1978年5月号 筑摩書房。
- 波多野完治 1935『文章心理学』三省堂(『文章心理学<新稿>』大日本図書、1965年)。
- 比嘉正範 1976a「認知学習理論と外国語学習」『英語教育』1976年7月号 大修館書店。
- 1976b「日本語と日本人社会」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語 1 日本語と国語学』岩波書店。
- 井出祥子 1981「女の文章と女らしさ——木村治美の文章のケース・スタディー——」堀素子・F.C.パン編『社会言語学シリーズ No.3 ことばの社会性』文化評論出版。
- 入谷敏男 1964「ことばとパーソナリティ」『増補 言語心理学』誠信書房。
- 片口安史 1961「現代一流作家の心理診断報告」『国文学 解釈と鑑賞』1961年11月臨時増刊号 至文堂。
- 国立国語研究所 1957『敬語と敬語意識』秀英出版。
- 黒田正典 1964『書の心理』誠信書房。
- Labov, W. 1972. *Sociolinguistic patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Lyons, J. 1981. *Language and linguistics*. London & New York: Cambridge University Press.
- 南不二男 1979「言語行動研究の問題点」南編『講座 言語 第3巻 言語と行動』大修館書店。
- Newman, S. 1930. Personal symbolism in language patterns. *Psychiatry*, 2:177-82.
- 野元菊雄 1957「ことばの個人差」岩淵悦太郎他監修『講座 現代国語学

Ⅲ ことばの変化』筑摩書房。

————— 1978 「言語における社会と個人」『言語生活』1978年5月号  
筑摩書房。

岡堂哲雄 1975 『心理検査学』垣内出版。

大山正・詫摩武俊・中島力 1974 『心理学』(第2版) 有斐閣双書。

パン, F. C.・白川陽子 1977 『女性言語の地域差、年代差と個人差：都市化による一考察』F. C. パン編『環境とことば』文化評論出版。

真田信治・柴田武 1982 「日本における社会言語学の動向」特定研究1)「学術研究動向の調査研究」報告。

Sapir, E. 1927. Speech as a personality trait.

*American Journal of Sociology*, 32: 892-905.

Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique generale*.

Paris: Payot.

柴田武 1978 『社会言語学の課題』三省堂。

柴谷方良 1982 「社会言語学と変形文法」『言語』1982年10月号 大修館書店。

上野善道 1978 「アクセントの個人差をめぐる研究概観」『言語生活』1978年5月号 筑摩書房。

Weinreich, U., W. Labov and M. Herzog. 1968. Empirical foundations for a theory of language change. In W. P. Lehmann & Yakov Malkiel. (Eds.) *Directions for historical linguistics: a symposium*. Austin & London: University of Texas Press.

山口仲美 1979 山口編『論集 日本語研究8 文章・文体』有精堂。

安本美典 1965 『文章心理学入門』誠信書房。

————— 1966 『文章心理学の新領域』誠信書房。

# On the Relationship between Individual Differences in Language Use and Personality: Theoretical Framework and Review of Preceding Studies

Masayoshi KOBAYASHI

This paper is concerned with the relationship between individual differences in language use and personality. The user's personality is considered to be the most forceful factor affecting his use of language. The basic aims of this paper are: (1) to present a theoretical framework for studying the relationship between the two, and (2) to review preceding studies, both theoretical and practical on this subject. The author recommends that we should adopt Chomsky's 'Competence-performance' linguistic theory in order to understand the influence of personality on language use, but we should investigate by means of sociolinguistic methods. There have not been enough studies on this subject to produce an established methodology therefore further study is still necessary.